

ている場合と、資産が平等で、そこからの収益が、各自の必要なし勤労所得にわずかずつ付け加わっている場合とでは、経済全体での消費需要が変わってきます（後者の場合の方が大きい）。そうすると、景気の後者がの方がよくなるということが起こります。ですから主流派経済学的手法であるからといって、必ずしも階級的な見方と相容れないわけはありません。むしろ、利潤と賃金の分配や資産格差などの経済的な制約によって、個人個人の振る舞い方が規定され、それが社会全体の再生産に影響する様子をはつきりと示すことができるという点で、階級の見方に親和的であるとさえ言えるかもしれません。

【経済学は世の中を「タテ」に切り分けて見ない】

階級の見方と逆の見方は、経済的利害ではない特徴で分けられたグループの対抗関係が、世の中を動かす本質であるとする見方ではないでしょうか。もともと典型的なのが、「国」や「民族」で人を分ける見方だと思います。私は、ホームページや著書でこんな図を掲げています（図1-1）。「右翼」とか「左翼」とかという言葉はどういう意味なのかを説明した図です。

世の中を「タテ」方向に切つて、「ウチ」と「ソト」に分け、「ウチ」に味方するのが「右翼」で、世の中を「ヨコ」方向に切つて「上」と「下」に分け、「下」に味方するのが「左翼」だと

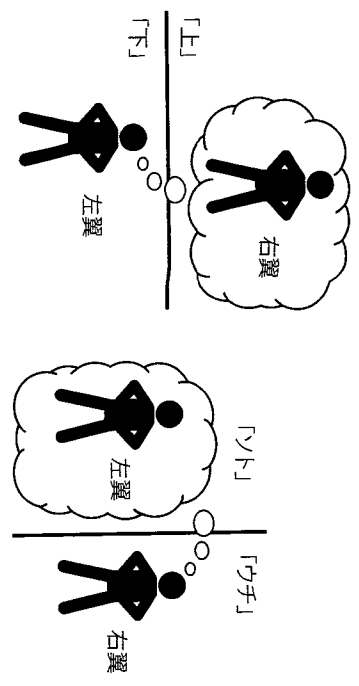


図1-1

いうことです。「タテ」に切るのか、「ヨコ」に切るのかによって、世界観の根本的な違いが現れると考えられます。右翼の人でも左翼の人でも、自分の世の中の切り分け方を当然のことと思っているので、敵もまた自分と同じ見方をしていると同時に、そうして切り分けられた世の中の反対側に立つ者とみなします。つまり、右翼の考える「左翼」は、「タテ」方向に切り分けた世の中の「ソト」側に味方する者とみなされるので、それと違つて左翼の考える「右翼」は、「ヨコ」方向の世の中を切り分けて、その「上」側に味方する者とみなされず、世の中の「ウヨサヨ論議」が、たいてい噛み合わないのは、これが原因だと思われれます。この「世の中をヨコ方向に切り分ける」という仕方が「階級の見方」になります。マルクス主義は当然、この見方に立つて被支配階級の側に立つので、左翼になるわけです。リカードなど

? [http://matsuo-tadasu.ptu.jp/young\\_yosayyo.html](http://matsuo-tadasu.ptu.jp/young_yosayyo.html)  
拙著『新しい左翼入門』（講談社現代新書、二〇二二年、二五三ページ）

「ここからのマルクス経済学入門」（松尾、橋本：筑摩書房）

は、この切り分け方をしたにもかかわらず、資本家階級の側に立ってしまいましたから左翼ではありませんが、ざりどて右翼でもなかつたわけでは、

資本主義経済体制を擁護する多くの主流派経済学者は、世の中を明示的に「ヨコ」方向に切り分けて理論を作っているわけではないかもしれませんが、でも実質的には「ヨコ」方向に切り分けて「上」側についている人が多いのだと思います。

先に述べたように、主流派経済学では、そもそも世の中を「切り分ける」ということをあまりしないのですが、「ヨコ」方向に切り分けるやり方を組み入れることは簡単にできるのです。資産の多寡など、量的な尺度を変更するだけで済むので。

それに対して、「タテ」方向に「切り分ける」やり方の場合、自らの理論体系に組み入れるのは、そう簡単なことではありません。こんちども経済学の基本原理とされるリカードの比較生産費説の自由貿易論のように、異質な人々と取り引きをすることは、みんなをトクにするというのが基本的な見方になります。それゆえ主流派経済学は、本質的に右翼ではあり得ないのです。これは、あらゆる経済学に共通する、「経済学」の本質的な特徴からきているように思います。

### 【世の中を「タテ」に切り分けて見ると経済的利害を見誤る】

それに対して、「世の中をタテ方向に切り分ける」という仕方は、階級的な見方とは本質的に相容れない発想ということになるわけです。

書店の経済書コーナーに行くど、国ごとに企業が固結して世界市場で経済競争をしているというイメージで論じている本がたくさんあります。これが、「世の中をタテ方向に切り分ける」発想の典型だと思えます。現実には、世界市場で競争するほどの企業が国家に忠誠心を持つはずはなく、不利だと思つたら、とつと国を捨てて出ていくものですけど。

現在は、ネットでも右翼的な言説があふれていますので、若い人たちの中には、世の中をタテ方向に切り分けて見るのが「常識」で、ほかの切り分け方など考えてみたこともないという人が少なくないかもしれません。しかし、私たちは生活していかなければならないのですから、どのような「切り分け方」が経済的な利害の現実をきつちり反映しているのかを、曇りのない目で見て取るようにしないと、無用な犠牲を自ら引き受けることになりかねません。

例えばこんな例を考えてみましょう。

日本企業が、独裁政権下の発展途上国の賃金が安いという理由で進出して、日本国内の工場はコスト高を理由に閉鎖してしまうことは、これまでよく見られたことです。右翼の人たちは中国が嫌いですから例として都合がいいので、それを「中国」——最近賃金が大いぶ上がってきていますけど——ということにしておきましょう。日本と比べれば依然として賃金格差は大きいし、

3 — 生産性があらゆる財について優れた国とあらゆる財について劣った国との間でも、その中でも比較的得意な財の生産に特化して交換しあえば、両国ともトクをするとする原理。

安全基準などの労働条件も中国の方がずっと緩いので、日本企業の進出先としてそう不自然ではないかと思えます。それはともかく、こうした理由で日本の企業が中国に進出し、現地に工場を設置したせいで、国内の工場が閉鎖に追い込まれ、従業員がリストラされて大変でしたから、右翼のみなさんの怒りに油を注ぐことになっているのだと思います。

さて、進出してきた日本の企業に対して、現地の工場労働者たちが、もつと賃金を上げろとか労働条件を改善しろとか言っつて、戦闘的な労働争議を起こしたとします。このため、現地法人の日本人管理職が突き上げをくらって大変な目にあっている。そうしたことが頻発したとします。あなたなら、これをどう評価しますか。

「同胞がひどい目にあっている。中国人はけしからん」と思っつて、「中国政府に処罰を要求しろ」とか「中国と戦争だ！」「経済制裁をしろ！」とか言い出すのが「世の中をタテ方向に切り分ける」発想です。ネトウヨの人たちとかはそうですよな。

ところが、中国で賃金上がり、労働条件が改善されたならば、賃金も上がるわけですから、日本とのコストの差は縮まって、海外に進出するメリットが減じます。中国の労働者にとって、当然賃上げは利益となりますが、日本の労働者にとつても雇用が守られることになるので利益になります。ですから、「中国の労働者ガンバレ」と労働争議を応援することが、日本の労働者にとつての「階級的な見方」ということになる。

ところが、中国共産党の独裁者にとつては、外国から企業が進出してくれなくなると経済発展どころが、中国共産党の独裁者にとつては、外国から企業が進出してくれなくなると経済発展が進まないで、おいしい思いができなくなつて困ります。特に現地の有力者は、日本企業がわりを贈つたり姻戚関係を結んだりし、癒着しているケースが少なくないです。ですから、あまにも労働争議が激しくなると、容赦なく弾圧してくるでしょう。つまり、日本の資本家と中国の権力者もまた利害を共有していて、日本と中国の労働者の共有する利害と対立するということなのです。

「階級的な見方」に立つならば、当然、労働争議を繰り広げる中国の労働者を支援し、労働運動を弾圧する中国の権力者を弾劾しなければなりません。

これに対して、「世の中をタテ方向に切り分ける」右翼の立場からすれば、運動が弾圧されて、日本人経営者が救われると同時に、日本企業がふたたび利益を上げられるようになることが「いいこと」になります。その結果、日本企業が進出しやすい状態が続くわけですから、この右翼氏が労働者ならば、将来工場が閉鎖されることになつて職を失うことになるかもしれません。あるいは、中国へ進出した日本企業が、現地の労働者を低賃金・低労働条件で雇つて作らせた激安商品のせいで職が脅かされるかもしれない。あるいは、中国へ進出した日本企業が大幅に上げた外貨が日本に送金されて、円に交換されて円高をもたらし、そのせいで景気が悪くなつて雇用が脅かされるかもしれない。結局、国籍や民族といったアイデンティティにとられすぎた結果、自分の首を締めることにな